

## 春季展覽會の水彩畫

トモエ會

○此會は寧ろ水彩畫の展覽會ともいふべく、殆ど百枚近くあつて、油繪に比して其數は遙かに多い。吾々の見た時は番號のみで一々畫題がなかつたから、繪そのものに就て精しく批評する事は出来ぬ、夫故こゝには各作家の作品に現はれたる特質を紹介することとした。

○トモエ會といへば五姓田芳柳を聯想する程多作を以て知られてゐた同氏は、何故か本年はたゞ二枚の水彩畫を見たのみである。繪は南洋あたりの緑の茂みで、有繫に羣を抜いてはいるが、例によつて調子が弱く、色もまた單調であるやうに思はれた。

○『みづゑ』のエハガキ競技會でお馴染の青梅の瀧島寛水氏も二三の出品があつた。

『御手洗』を寫したものは苦心の作ときいてはゐたが、何處となく締りがなく、矢張り素人放れのしない處がある。繪ハガキのやうな小さなものでは其人の力を示しがたく、同時に眞の繪をかく上にあまり益がないから、大きな畫

汀晚

覺霞



一 全 田 山

等 一 草 若

面でドシ／＼研究されたい。  
○依田忠亮氏の靜物畫は何れも忠實で、形や色彩の配置もよく、將來有望の作家であらう。

○東城鉦太郎氏の水彩畫は實に淡白を極めたもので、四條派の繪を見るやうである。このやうな描法でも、自然のある種の現象を寫すには差支はないが、自然の總ての現象を寫すことは出来ない。強く烈しい日光の照つけてゐる感じとか。壯大な重々しい境地は到底描き出す事は出来ぬであらう。

○場中で一番注意されたのは石川欽一郎氏の諸作である。氏の繪は數年前迄は、殊更に氣取つたかと思はるゝやうな描き方であつたが、近頃の繪にはそのやうな風も見えず、色も豊富になり調子もよく整つてゐて、非常に快よく思はれた。

○織田一磨氏の繪は美しい描法で、花の寫生など尤も手際よく仕上られてある。

この様なものにかけては誰れも一寸眞似が出来ぬであらう。かゝる繪は嚙み締めて味の出るといふ所謂含蓄の多い側ではないが、見た眼に快感を與える力は充分ある。但し繪を學びつゝある若き人達が、己れも一番あんな風に

と、若し思つたら間違である。同氏の作でも『温室内』や『汽罐車』などは圖の大きい丈けに統一してゐない。そして遠近の調子も充分でない。殊に『汽罐車』の如きは氏の本領であるまいと思はれる。

○玉置金司、尾瀬田良恭二氏の作は、數年前に比して進歩したとは思へない。修養の暇を持たれぬ爲めてあらうか、何卒次の會には更に立派な作を出されんことを切望する。

○他に鶴澤四丁氏の作が澤山あるが、同氏は本誌に直接の關係を持つてゐらるゝから、爰には批評を省くこととした。

○要するにトモエ會の水彩畫は、會全體を通じて調子の低い繪のみで、輕妙、御手際、洒落、淡泊といふやうな形容

詞を不殘並べたてゝ評すべきもので、繪の上に深さや重さは殆ど見られない。此やうな風が決して悪いと批難するものではないが、多少水彩畫を弄ぶといふ様子が見えて、極真面目に水彩畫を研究したと思はるゝものゝ少ないのは事實である。或る畫家は『トモエ會の人達はロンドンあたりの眞に仕上げた水彩

畫を見たことがないからだ』といはれたが夫が爲めてはあまい、恐らくは會の首腦たる五姓田、石川諸氏の輕妙なる作が、自然に模範となつて一種の畫風を作つたのであらうと思はれる。

#### 太平洋畫會

○この會の水彩畫は作家二十七人で百三十點程ある、爰にはその重なるものについて所感を述べやう。



蝶 賀井和

和賀井和

○長谷川曾一氏の作では『夕の光』といふのが一番よい出来である、『しづか』といふ繪は、遠景の色は面白いが、前にある數本の黒い木の幹で全體の調子を破つて仕舞つた。『蓮池』などはまだ研究の餘地があらう、吾々は氏に向つて今少しく物質寫生を研究せられんことを希望する。

○藤島英輔氏の繪は隨分澤山ある、中で靜物の『面』はよい出来である、誰しも風景寫生よりも室内で描く靜物の方がよく出来るものである、他の繪のうちでは『鹽濱』など氣に入つた一つで、『花壇』は背景の森の色が生々しい、氏の出品は十七點の多きに達してゐるが、深き研究の結果と思はるゝ實の入つた作はない、それに何れも小楨ばかり

である、もつと大きなものを見て頂きたい。

○ボストンの松木喜八郎氏の筆になつたものが三點出てゐる、小幅ではあるがよく整つてゐる、氏は元よりアマチュアに過ぎぬけれど、さすが本場に居る丈けあつて常によいものを見てゐるから、其畫にも自然に影響を受けて、このやうなよい結果を得たのであらう。

○大橋正堯氏の繪では『春日野』が傑出してゐる。次は『舊都のおもかげ』であるが、これは地面に申分がある、氏は熱心な水彩畫家で、常に研究を怠らぬには感服するが、猶此上の望には、今一層奥行るある調子の確りしたものを描いて貰ひたい。

○星野誠二氏の靜物畫は、注意がよく行届いてゐる計りてなく、色調も穩やかな佳作である。

○中川八郎氏の出品畫は、孰れ



松木喜八郎

ボストンのツツリアンケ、夕

もグワツシ（胡粉入繪具で書いたもの）であるが中々意氣な描法である。少し洒落過たといふ評もあれど、兎に角眞の研究畫として待つことは出来ぬ。在米中のスケッチとして見れば勿論興味の多いもので、五枚のうち『雨後の夜市』が一番氣に入つた。

○平木政次氏の今年の繪は、描法が確りとして來た爲か總じて硬くなつた様である。そして色が寒い、尤も二枚共富士の雪景ではあるが。

○磯部忠一氏の作はそれ／＼面白い、殊に『桂川の雨』を第一とする。雨の心得もよく現はれてゐる、色も落ついて居て快よい繪である、『桂川のほとり』も佳作である。

○石井滿吉氏の繪は二枚ある、『秋色』と題するもの、實は昨年初夏の作で、誰れかよい加減な

畫題をつけたのであらう。氏の着筆は軽く、しかも色調は重い方で、描法の素直な割合に確りした者が出来る。此圖は捨難い趣はあるが、僅か一二時間のスケッチに過ぎぬから、元より氏の本領を窺ふことは出来ぬ。

○沼邊強太郎氏の出品のうちでは、雨の繪と富士を描いたものがよいと思つた。其他の作も悪くはないが、少々書き放しといふ氣味で物足らぬ。氏は年々多數の大作を出さるゝが、濼いといふのでもないが何となく引立たぬのは、餘りに色彩を殺し過ぎる爲ではあるまいか、今少し活々とした色を使つたら一層見榮えがするであらうと思はれる。

○参考室にはボストンのチャールズ、エッチ、ペツパー氏の水彩畫が二枚ある。一を『たくらみ』といひて、二人の惡漢が大なる建物の欄にもたれて、何事か秘密に相談してゐる圖である。全體が濼いセピア色で、感を強するため凄い黒雲が舞下つて來てゐる。一部分の描寫でありながら、不思議な程繪が大きく見える、クレオンペンシルなど使つて達者な描き方である。

○他の一面は『グリーンドア』といふので、綠色の戸の前に婦人の立つてゐる圖である。ホアイトの多量を使用してある故潤澤がないが、色は何れも靜かな落ついた調子である。

○本誌の眞野氏の出品及吾々 繪については、他日折があつたら所感を述べて見やう。

## 『春』の説明

(みづゑ第十參照)

S K 生

水彩で人物畫を正直に仕上たものは、吾邦の今の石版術では到底印刷する事は出来ぬ、夫故已むを得ず極めて省略した描法をとつた。

圖は見らるゝ如く、田舎の風流な老人とその孫娘とであつて、瓢と辨當とを携えて御花見にゆく道である。さて人物畫の尤も六づかしいのは顔の着色である、此繪はカーマイン、マダーレーキ、ブラオンマダーの類が主な色で、老人の鬚は通常多少の黄色を帯びてゐるものであるから、僅かのレモンエローを用ひ衣服はインヂゴに少許のエローオークルを加へ、下穿と足袋はロエーオークルに薄きブラオンマダーを使用し、帽子や衣類の陰の暗い色はニューラルチントにブラオンマダーを交へしもの、瓢はエローオークルとブラオンマダーで成つた。娘の衣類はインヂゴで、襦袢の襟はヴェルミリオン、腰巻はエローオークルにクリムソンレーキが加はり、陰は同じくブラオンマダーである。空はコバルト、地平線の方にクリムソンレーキが入つてゐるのは見た通り、草はホーカスグリーンで、其他は別に細説の要もあるまい。